

キリストは、そのご生涯を1世紀初頭の古代地中海世界の東端で送られました。広大なローマ帝国の支配する諸国の文化や有様も、ギリシアの神殿も、大都市ローマの町も知ることはありませんでした。辺境とでも言うべきユダヤのベツレヘムで生まれ、ガリラヤのナザレで育ち、エルサレムで処刑され、葬られました。しかし、その後復活されて弟子たちに顕現し、福音伝道へと派遣する命令を伝えます(マタイ28:17)。ここから、キリスト教が生まれます。ここに私たちの信仰のルーツがあることは確かです。

主イエス・キリストのご生涯がキリスト教の発端であるなら、新約聖書が描き出すイエス・キリストのお姿が、どれほど歴史の事実に根差しているかを問いたくなるのは当然です。19世紀後半には、新約聖書学という学問が生まれ、歴史のイエスとイエスがどのようにしてキリストと宣べ伝えられるようになったかを研究する営みが、教会や大学で行われました。

歴史のイエスを知るためには、教会の神学が「脚色」した信仰のキリストを取り去ることが必要ではないかという問いが生まれ、聖書テキストの成り立ちを解明することで、最古の資料の証言や聖書の時代背景に制約されることのない時代を超えた「真理」を取り出そうと多くの学者が試みました。

しかし、21世紀になると、歴史と信仰を切り離すこと自体が正しいのかどうか問われるようになります。19世紀から始まった歴史と神学の相互不信を解消し、新約聖書が描き出す、歴史を生きた主イエスの姿こそ、その方をキリストと信じる信仰共同体の確信と経験に基づくものであると改めて考えられるようになります。

わたしたちは、キリストのご生涯を、初代の使徒たちや福音書記者たちがしたように、歴史を生きたイエスというお方を、信仰と神学的な関心から見する必要があります。歴史の傍らにいたというだけでは、確実に最良の証言者にはならないのです。写真週刊誌の記者が、取材対象の最良の証言者とは言えないように、歴史的な出来事の近くにいたというだけでは、確かな情報源とはなりえないのです。

キリストのご生涯を証言する新約聖書の各文書は、歴史のイエスをキリスト(救い主)として描き出すことで、歴史と信仰の不可分性を内在させています。マルコによる福音書の冒頭は、「神の子イエス・キリストの福音の初め」という言葉で始まります。使徒パウロは、コリントの信徒への手紙(二)15章3節以下で、主イエスのご生涯についての最古の口伝伝承を紹介しながら、15章14節で、「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」と語っています。歴史と信仰が不可分であることは、聖書そのものが証言するとともに、その証言を継承して、その証言に生きてきた教会の生(礼拝や祈り、祝祭)が明らかにするところです。

したがって、歴史と信仰の不可分であることは、理論的に確認できる事実と言うよりも、はるかに経験的なものです。あるいは、私たちが活ける神を礼拝するところから与えられる確信と言っても良いでしょう。

聖書が描くキリストとは、確かに歴史を生きたイエスという一人のユダヤ人です。同時に、今礼拝に生きて働くキリストです。この方は、すでに十字架で死に、葬られ、陰府に下り、復活して天に挙げられ、再び再臨される方です。この方を確実に知るためには、信仰の眼が必要です。歴史のイエスそのものが、天に挙げられて、神の右に座しているキリストであり、歴史と信仰を一致させる存在です。

2~4世紀にかけて、キリスト教の信仰と教えが確定していく時代には、歴史と信仰の一致を求める営みが多くの教父によってなされました。キリスト教は、そのような観点からイエス・キリストを信じ続けました。しかし、啓蒙主義の時代以降は、むしろ両者を切り離すことで、ある人々は、歴史こそ確実に知りうる永続的なものを提供すると考え、またある人々は、歴史こそ不確かであるゆえに、歴史を超えた真理の探究こそ為されるべきことと考えて、両者は分裂状態に陥っていきます。21世紀は、幸いなことに、歴史と信仰を切り離す思考の枠組みが、以前ほどわたしたちを縛り付けない時代となっています。